「書心画也」 ー書は心の画(え)であるー

揚雄(ようゆう)の言葉（前53－18・前漢末の学者）の『法言』中の「問神」篇の中の一文

「・・・或問神，曰心。請問之，曰潛天而天，潛地而地，天地神明而不測者也，心之潛也，猶將測之。況於人乎，況於事倫乎。敢問潛心於聖，曰昔乎仲尼潛心於文王矣達之。顔淵亦潛心於仲尼矣未達一間耳。神在所潛而已矣。・・・言不能達其心，書不能達其言，難矣哉。惟聖人得言之解，得書之体，白日以照之，江河以滌之，⁇乎其莫之御也。面相之，辞相適，？中心之所欲。通諸人之⁇者，莫如言。彌綸天下之事，記久明遠，著古昔之旃旃，傳千里之忞忞者，莫如書。**故、言心声也。書心画也。声画形、君子小人見矣。声画者、君子小人所以動情乎。・・・**」

それ故、「言」は「心」（精神活動）の「声」（音、音声）であり，「書」は「心」の「画」（図象、紋様）である。「声」や「画」はひとたび表現されると、君子であるか、あるい小人であるかをはっきりと露顕させる。そのためこの「声」（音、音声言語としての言葉）と「画」（図象、文字文章）は君子および小人の内心の思想や情感，修養，品徳などの精神領域を表現し反映する媒体と言える。

言心聲也　書心畫也　聲畫形　君子小人見矣

言は心の声なり　書は心の画なり　声画形（あら）われて　君子小人見ゆ

現代語訳

言葉は心が発する声であり、書は心を表す画である。

葉を聞き書を見れば，君子か小人かが分かる。

李斯(りし)の言葉

（宋朱長文『墨池編』の中の李斯の言「巻一、秦李斯用筆法」）

「・・・書の微妙は、その**規律が自然界の規律に合致する**ところにあり、大篆以前の人びとの中でこのような微妙を得た者がなく、私も聞いたことがない・・・私李斯がこの大篆・・・を整理して・・・小篆を作った。おおよそ書（文字）は字の結構ただ均整調和してさえいればよいというものではない。書の優劣美醜の決め手は最終的にはやはり**「用筆」の巧妙さ**によって得られる点画や文字の**生き生きとした流暢な優美さと強健さ**である。・・・用筆の方法はまず初めに空中で筆を操ってその筆勢を整え、その後にはじめて落筆する。それはあたかも鷹や鵬がはじめに空中を旋回して獲物を見定め、そうしてから急降下して捕捉するようなものである。このようにするならば・・・あたかも魚が水を得て悠々と水中を泳ぐようであり、また高山の頂きに雲が知らず知らずのうちに湧き起こってくるように、**自然で伸び伸びとしたもの**になる。・・・用筆の規律や方法を理解し掌握したならば、必ずや書の用筆が生みだす書美、芸術美を顕現することができる。・・・」

※統一秦代あたりから、書が単なる情報を伝達する道具から脱却して、血の通った生きた芸術、美の対象となった。その第一人者が李斯である。書の技巧や美醜が論じられ、書写が誰だか注目されるようになった。

李斯は文字を統一することを上奏した。それで、李斯が『倉頡篇(そうけつへん)』趙高(ちょうこう)が『爰歴篇(えんれきへん)』胡母敬(こぼけい)が『博学篇(はくがくへん)』という字書を作った。これらは漢代に合わさって『倉頡篇』と称されるようになった。識字のテキストとして漢代には8歳から15歳の児童が約三三〇〇字を習った。

蒙恬(もうてん)の言葉　（**筆の改良者**。万里の長城2400 kmに及ぶ修築。全長800 kmの直道の建設など）

「・・・もしも**用筆法**を理解し掌握して文字を書いたならば、その書は必然的に自然で流麗優美な文字となる。・・・」（宋陳思『秦漢魏四朝用筆法』より）

功により始皇帝より管城の地を与えられた。この故事により筆の異名を管城といい、筆匠を管城師と称する。

「書者散也」ー書は散なりー

蔡邕の言葉（132年ー192年　後漢末の人）『書説』、『石室神授筆勢』などの書論がある。

「書は散なり」は『書説』に出てくる言葉。「書者散也。欲書、先散懐抱、任情恣性、然後書之」（書は散なり。書せんと欲すれば、先ず懐抱を散じ、情に任せ性を恣にし、然る後に之を書す）「散」とは「ときはなつ」こと。懐抱を外に解放すること。「懐抱」とは「心にわだかまるもろもろの思い」のこと。空海が著書で引用している言葉。

蔡邕は「用筆」の重要さと、用筆の「理」に通じる必要を述べ、「用筆の理」は書道上だけでなく天地宇宙や人生の理に通じるものでなければならないと述べている。

書作は自己の感情から解放されるという作用をもった感情表現である。・・・感情を燃焼させ、昇華させ、亡失させる力を持っている。そのためには用筆の理に精通していなければならない。（感情の解放と用筆の理との関係の中に書の表現のあるべき姿を考えたのは、蔡邕が最初であったと思われる）

用筆法の二大原理

篆筆ー円筆ー直筆ー渋勢（沈着）

隷筆ー方筆ー側筆ー疾勢（痛快）

この二法の応用により如何なる質の線も引ける。疾渋一体、遅速一体

「力」と「勢」（筆力と骨力の充実が線の美を生む）　「蔵頭護尾」

「直来直去」は悪筆とされた。

線の意味

漢字は人智を超えた神の象徴として誕生した。漢字は物の形を平面ではなく線によって表現する。甲骨文から金文、大篆、小篆の過程は線条化の過程である。漢字は絵画的描写的であることをやめ線構成の方向をたどった。線は人間的判断の力強い表現である。書道では線のことを「画」という。「画」は古代では「畫」と書き、筆を持ってえがく、筆で絵をかく。筆で区切る、などの意味であった。甲骨文の時代には「劃」とかかれ、刀が筆に変わると「りっとう」が捨てられて「畫」が残った。

「書画同源」と言われる所以であるが、書の線は絵の線とは違う。書は色彩のない世界であるため筆法、筆勢、筆意、章法だけでなく、文意や字音などの文学的感性にも高度な技が必要である。

書芸術の基礎

漢字の起源を追求することが書道の原点である。なぜ漢字に美を感じ、それがどこから生まれるのかをはっきりと認識するために根源まで遡るのである。書道というものが芸術としてはっきり自覚され始めたのは小篆と漢代の隷書の時代になってからである。

古代文字の時代の終焉

紀元前206年秦の滅亡から楚漢戦争を経て漢代では公式書体として隷書が採用された。筆記手段としての役割を優先した文字政策は「権力の象徴」として存在し続けてきた文字の概念を完全にくつがえし、甲骨文字以来約1，500年間つづいてきた「古代文字」の時代の終焉を示すものであった。小篆と秦隷（隷変と言う）を分水嶺に秦以前の文字を古文字時代、以後を今文字時代と呼んだりする。中国人の線の中に力を見、力の質を見、時間の流れを見る感受性は古代中国において文字が神のことばを伝える、神のごとき存在であったということからきていると思われる。

小篆の構造

縦長の字形（下部を長くした縦画による統一）上部に中心点を持ってきて脚部を長くのばし（垂脚）威厳を表現。

縦横の比率は3対2ないし1.4対1の割合が多い。

垂直・水平の原理　等分割の原理　中心線一貫の原理　左右対称の原理（均整の原理）

線は同じ太さで統一　運筆は等速等圧で渋勢　逆筆蔵鋒直筆中鋒　円勢（円味がある）

荀子（前313？～前238？）

学は以て已むべからず。

（現代訳）学問は途中でやめてはならない。

青は之を藍より取りて而も藍より青く、
氷は水から之を為して而も水より寒し。

驥は一日にして千里なるも、
駑馬も十駕すれば、即ちまたこれに及ぶ。

人の性は悪にして、其の善なる者は偽なり。

韓非子（？～前233）韓の公子（荀子の「性悪説」、老子の「無為」、商子の「法」、申不害の「術」とを総合して、統治理論「法術」を編み出した。法家思想の大成者。

変革を主張し儒家の復古主義に反対し君主に権力を集中することを説く。どのようにしたら効率的に人民を統率し国益へと導くかを考えた。法は姦邪を禁じ、国家の利の所在を明らかにすることによって、人民を追従させ、富国にするためにある。利害関係の相違する人民と君主を結びつける紐帯のようなものである。

「事因於世、備因於事」　事情は世の状況によって変わり対策は事情によって変わる。

礼によって治めえた古の統治法（仁義の政治）は会盟政治で知謀を競う春秋時代や（知謀の政治）兵力の大小によって国の存亡が決定する戦国時代（力の政治）には通用しない。

「・・・以法為教・・・以吏為師。」・・・法を教えとし、・・・官吏を師とする。

書物はいらない、法さえ知っていれば良い。→これが焚書につながる。

「民固驕於愛、聴於威」　人民は、もともと愛されることに対しては驕慢になり、脅かされることに対しては服従するものである。　愛情、徳行、知恵では人を制することはできない、制することができるのは罰である。

「守株」　株を守る

聖人は昔行われたことを繰り返そうとはせず、また昔から行われてきた習慣に従おうとはしないものだ。現在の実情を論じ考え、そしてその対策を考える。

儒家の徳治主義を批判し、法家の法治主義の正当性を主張するためのもの。

「矛盾」

「二柄者刑徳也」　賞罰　虎の牙と爪と犬

「非愛也」

「人間は自己の利益の為に行動する」

「人を信じることは有害である。人を信ずれば、自分が人に抑え込まれる」

「君主と臣下の立場は矛盾する」

六つの乱のもと　（太后・后妃と愛妾・庶子の子孫・君主の兄弟・重臣・有名になった学者）これらを法によって治めよ。

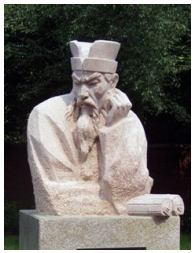
「五蠹」（国の礎を食い荒らす五種類のキクイムシのこと）　学者・遊説者・遊侠・側近・商人と職人

商鞅（？－前338）戦国時代中期の秦の政治家。「商子」

法家思想家。富国強兵の施策による君主権の強化。

対外的には戦争、対内的には農業の重視、厳刑主義の法治政策、学者・手工業者・商人の抑圧の主張。

紀元前359年秦の孝公は商鞅の変法を用いた。



参考書その他

『甲骨文の世界』　白川　静　平凡社・東洋文庫　1974
『金文の世界』　白川　静　平凡社・東洋文庫　1976
『漢字の世界』①②　白川　静　平凡社・東洋文庫　1977（平凡社ライブラリーは2003刊）
『古代中国』　貝塚茂樹　講談社学術文庫　2000（1974年刊『中国の歴史1』を改題）
『古代殷帝国』貝塚茂樹編　みすず書房　1957
『甲骨文字の読み方』　落合淳思　講談社現代新書　2007
『甲骨文字に歴史をよむ』　落合敦思　ちくま新書　2008
『漢字学』　阿辻哲次　東海大学出版会　1985
『図説漢字の歴史』　阿辻哲次　大修館書店　1989
『書道研究ー甲骨文の研究ー』1988・12　美術新聞社
『書道研究ー秦漢の肉筆の研究ー』1990・3　美術新聞社
『中国法書選1ー甲骨文・金文ー』とガイド　二玄社　1990
『中国法書選2ー石鼓文・泰山刻石ー』とガイド　二玄社　1990
『中国法書選10ー木簡・竹簡・帛書ー』とガイド　二玄社　1990
『図説中国書道史』　芸術新聞社　1991
『篆書百科』　芸術新聞社　1994
『中国古代の書（全5巻）』　天来書院　2001
『中国の城郭都市』　愛宕　元　中公新書　1991
『秦漢帝国ー中国古代帝国の興亡ー』　西嶋定生　講談社学術文庫　1997
『西嶋定生東アジア史論集』第一巻、第二巻　岩波書店　2002
『中国古代の神がみ』　林巳奈夫　吉川弘文館　2002
『神と獣の紋様学』　林巳奈夫　吉川弘文館　2004
『殷周時代青銅器の研究ー殷周青銅器綜覧1・2』　林巳奈夫　吉川弘文館　2000　専門的
『春秋戦国時代青銅器の研究ー殷周青銅器綜覧3』　林巳奈夫　吉川弘文館　1989　専門的
『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』　工藤元男　創文社東洋学叢書　1988専門的
『秦の始皇帝とその時代展』図録　1994
『秦の始皇帝ー多元世界の統一者ー』中国歴史人物選集第一巻　籾山明　白帝社　1994
『秦の始皇帝ー伝説と史実のはざまー（歴史文化ライブラリー）』　鶴間和幸　吉川弘文館　2001
『始皇帝陵と兵馬俑』　鶴間和幸　講談社学術文庫　2004
『中国の歴史3ーファーストエンペラーの遺産ー』　礪波　護ほか編　講談社　2004
『諸子百家』　貝塚茂樹　岩波新書　1978
『諸子百家争鳴』　貝塚茂樹　中公クラシックス・コメンタリイ　2007
『史記（1）ー覇者の条件ー』　司馬遷　杉本達夫他翻訳　徳間書店　1987（徳間文庫2005）
『中国の思想4　荀子』　杉本達夫翻訳　徳間書店　1996
『中国の思想』全13巻　徳間書店　1996
『マンガ孫子・韓非子の思想』　和田武司他　講談社プラスアルファ文庫　1990
『韓非』　貝塚茂樹　講談社学術文庫　2003
『集英社版　学習漫画　中国の歴史　1・2巻』　春日井明監修　2006
『中国詩人選集ー韓愈ー』（一集十一）『中国詩人選集ー蘇軾ー』（二集五）　岩波書店
『三星堆ー中国5000年の謎・驚異の仮面王国ー』展図録　1998
『好奇字展』パンフレット　立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所　2009
『文字の文化史』藤枝　晃　岩波同時代ライブラリー　1993
『呂氏春秋』　町田三郎　講談社学術文庫　2005
『戦国策』　近藤光男　講談社学術文庫　2005
『史記列伝二』　小川環樹他　岩波文庫　2003
『精萃図説書法論1』　平勢雨邨他　西東書房　1988
『中国の古代都市文明』　杉本憲司　思文閣出版　2002
『燃ゆる呉越』『争覇』ヤフー動画他
『大漢風ー項羽と劉邦ー』ヤフー動画　ＤＭＭ・ｃｏｍ　ＢＩＧＬＯＢＥ、ＶＩＤＥＯ、ＳＴＯＲＥ他
その他文献等多数